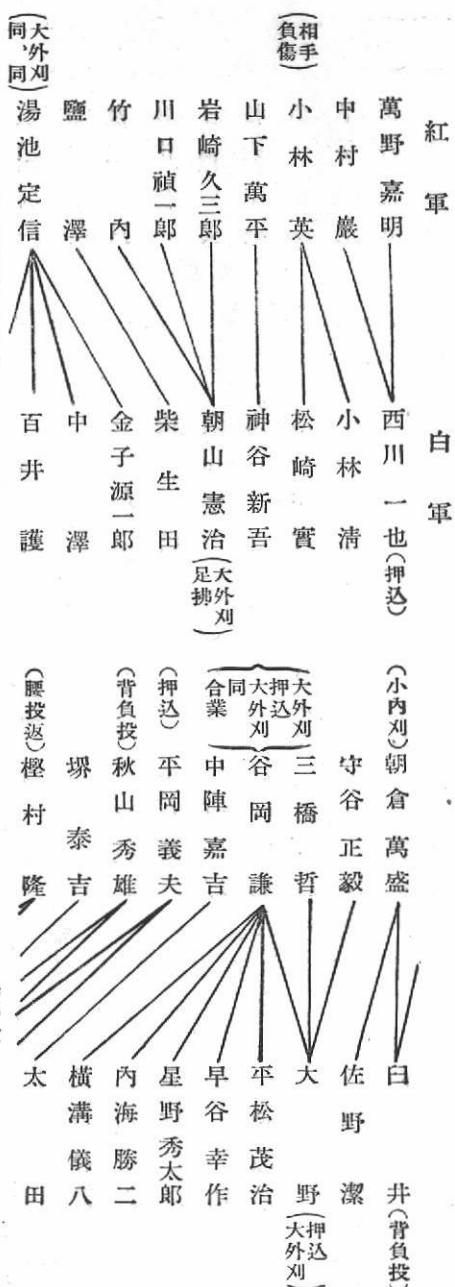


九 明治三十八年史

(一) 二つの紅白勝負

有級有段者の紅白勝負は、二月十二日と六月十一日の二回午前十時より新道場に於て開催された。説明的記事無き故、茲には唯表のみを掲げて置く。

○二月十二日の紅白勝負



名取新一 菊地武治

(押込) 齋藤衡平

林田峯次

(小外刈) 押込返刈

乾直介 古川治郎兵衛(押込)

中田忠治

白井善藏

西原久

久家長三 吉村萬次郎(大外刈)

(足拂)

神吉英三

小倉丹治

秋山修一 松永干城

(鞍腰投)

木村徳太郎

石渡泰三郎(大外刈)

山中福之助 古橋盛男

(四方固)

中野榮三郎

森本利三郎

山口峻(腰投)

(大外刈) 海江田平八郎

近藤謙治(合業)

南保一 岩田順一

(横捨身) 大塚莊亮

上杉彌一郎

麻生鶴十郎(絞)

(合業) 濱田精藏

高島一貫(後絞)

永瀧松之輔(左腰投)

濱田隆一(左腰)

山中駿吉

時任彦一 田村市郎

(跳腰) 吉武吉雄

三船久藏(合業)

遠口直次郎

副將平賀恒次郎

(脚将) 福田龍(相手負傷)

荒井武術

副將大將田

(脚将) 佐野甚之助

○六月十一日の紅白勝負

小野秀一

(跳腰) 柳井松祐

平松茂治(絞)

飯田尚一

(大腰投) 横溝儀八

名取新一

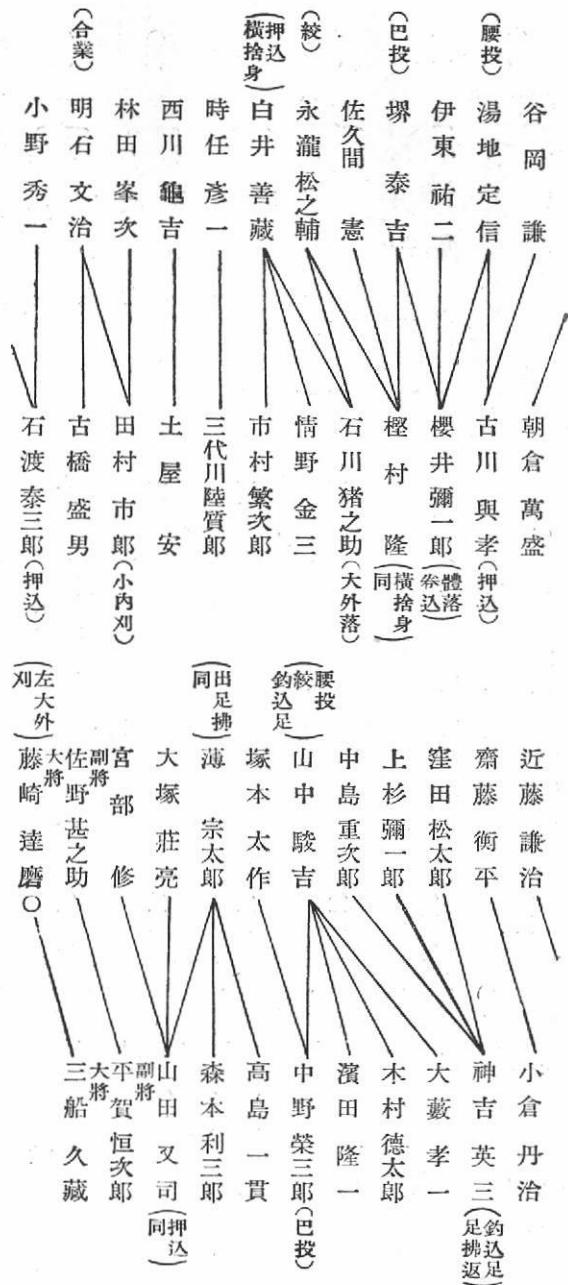
安藤年元

(大腰投) 菊地武治

伊豫田三郎

紅軍

白軍



(二) 無級者月次勝負

柔道部が益々隆盛を來せる結果、十月七日に舉行された月次勝負の如きは、義理ありて以來最も盛大なる勝負であつた。當日は紫組成年組を合して出席者總て九十八名、半日にては到底終了すべくもなかつたので、一度に二組づつ勝負を行ふの異例を開いた。

皆夏休以來腕を撫で居たる部員のこととて、甲組及び紫組五級邊りの人々殊に猛烈なる試合をなし、中でも乙組古川甚一が大外刈にて三名を倒し、甲組河西葦平が得意の背負投を以つて、又谷岡謙が大外刈と横掛を以つて數名を薙ぎ倒したる腕前は目覺ましかつた。

今左に成年組の勝負丈けを掲ぐ。

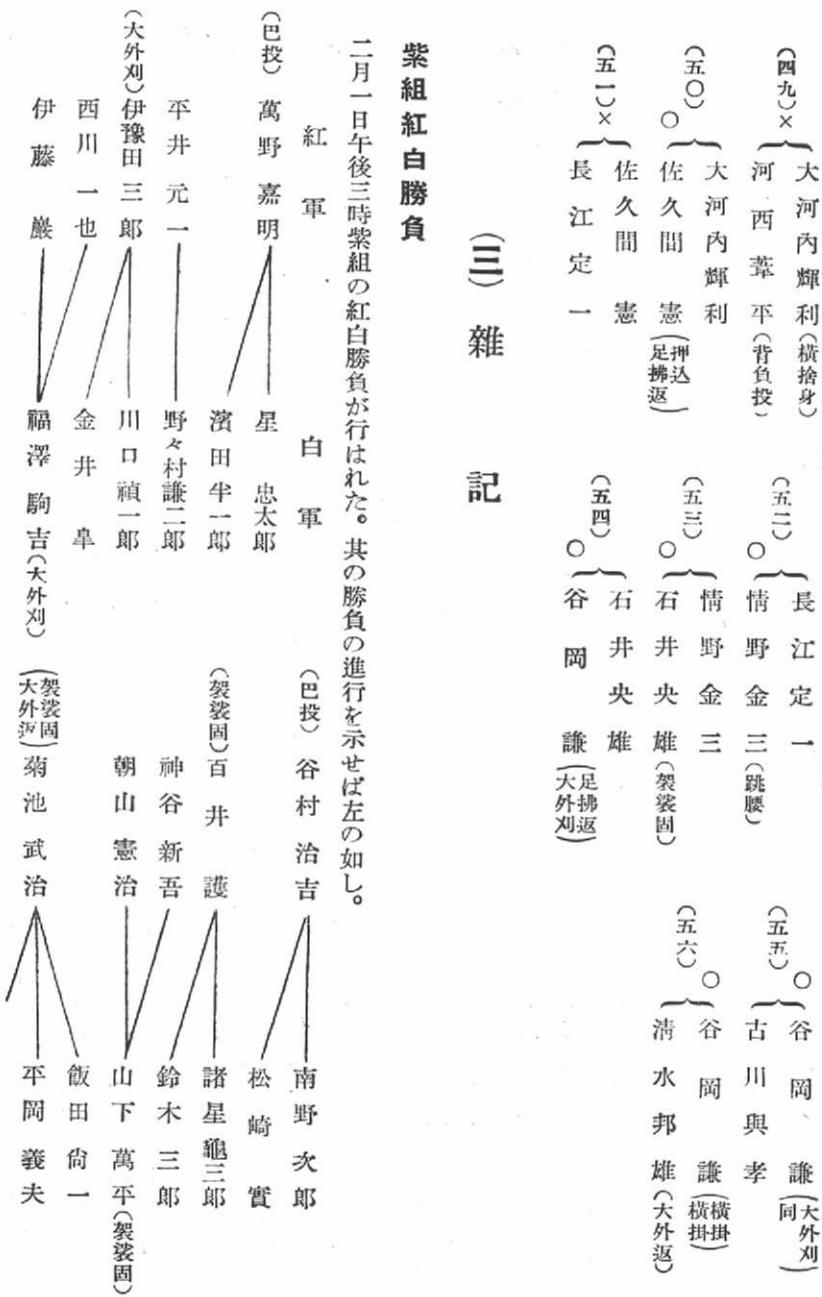
(一) ○ 稲垣 浩(腰業)	(八) ○ 五月女光三(足拂)	(一五) × 川村雄一郎
(二) × 稲垣 浩 藤原惣次郎	(九) ○ 五月女光三(鉤込足) 樋口喜一	(一六) 澤井繁雄 深田政太郎(四方固)
(三) × 林崎伊七 平川信勝	(一〇) ○ 山高信彦(背負投)	(一七) ○ 酒匂秀太郎(巴三本) 吉田双之助
(四) ○ 古川甚一(大外刈) 平川信勝	(一一) ○ 樋口喜一(押込)	(一八) ○ 酒匂秀太郎(背負投) 吉田双之助
(五) ○ 古川甚一(大外刈) 牧野吉次郎	(一二) ○ 樋口喜一	(一九) ○ 石井義藏(袈裟固)
(六) ○ 古川甚一(大腰刈) 篠部勇藏	(一三) ○ 高羽憲次(袈裟固) 津倉貞三	(二〇) × 石井義藏(袈裟固)
(七) × 篠部勇藏(痛分) 牧野吉次郎	(二一) ○ 山田義治	山田義治
(一四) ○ 川村雄一郎(袈裟固)	(二二) ○ 碓山磐(巴投)	

(二三) ×	碇山	石井俊三
(二四) ×	鈴木鐵太郎	平塚喜市郎
(二五) ×	高信彦	木岸甚一(大外刈)
(二六) ×	古川甚一(裏投)	金子靜雄(體落)
(二七) ○	峯岸鎮治(押込)	子靜雄(袈裟固)
(二八) ○	佐野鎮治(合業)	川邊(體落)
(二九) ○	朝野昇(跳腰返)	小佐哲(足押技)
(三〇) ×	西哲二	朝山昇(足)
(三一) ○	内海勝	内海勝
(三二) ○	守谷正毅	小西哲
(三三) ○	内海勝	内海勝
(三四) ○	作川信二郎	内海勝
(三五) ×	作川信二郎	内海勝
(三六) ×	朝倉萬盛	海勝
(三七) ○	平松茂治(大外刈)	朝倉萬盛
(三八) ○	緒方國綱(袈裟固)	平松茂治
(三九) ○	島崎靜之(同鉤込腰)	緒方國綱
(四〇) ○	島崎靜之(十字固)	島崎靜之
(四一) ×	島崎靜之	島崎靜之
(四二) ○	金子新次郎(絞足車)	島崎靜之
(四三) ×	富永鐵男(大腰)	金子新次郎(絞足車)
(四四) ○	寺内一夫(袈裟固)	寺内一夫
(四五) ○	河西葦平(背負投)	河西葦平
(四六) ○	寺内一夫(袈裟固)	河西葦平
(四七) ×	島谷直次	寺内一夫
(四八) ○	安藤年元(袈裟固)	島谷直次

(三) 雜記

紫組紅白勝負

二月一日午後三時紫組の紅白勝負が行はれた。其の勝負の進行を示せば左の如し。



(背負投) 河合 寅吉 金子 源一郎(袈裟固) (大内刈) 市村 繁次郎 中村 壮吉(袈裟固)
 安藤 年元 秋山 秀雄(背負投) (四方固) 遠口 直次郎 石渡 泰三郎(左大腰)
 古川治郎兵衛 三代川陸質郎(絞、同) (十字固) 西原 久
 松永 千城 高見澤廣作(大外刈) (卷込) 濱田 隆一 ○小野秀一(絞)
 (大將) 中島重次郎

多年幹事として柔道部の爲めに盡瘁せられた二段中村愛作及び初段佐野甚之助、並に部員として重きをなしたる初段大中圭介、一級濱田精藏同吉堀誠一の諸氏は、本年大學部を卒業、中村氏は遊學の爲め北米へ、佐野氏は印度に各々渡航することになった。(尙前記の諸氏は、卒業に際し上の段へ夫れぐ昇進した。)

右中村、佐野兩幹事の補缺として湯本芳三郎及び大塚莊亮の兩氏が其の後任に就かれた。

部員派遣

十月初旬早稻田大會に選手十二名を派遣せしが、十一月五日には講道館秋期大紅白勝負に二段二名(五月女、三船)、初段七名(吉武、福田、平賀、宮部、黒江、山田、大塚)、一級七名(中野、山中、塚本、薄、海江田、森本、濱田)其他合せて三十三名の大部隊を出場せしめ、皆好成績であつた。

進級一括

○十月の進級者

四級へ 河西葦平、石井央雄、清水邦雄、古川興孝、谷岡謙

○十一月講道館紅白勝負の結果初段に列したる者

塚本太作、山中駿吉、中野榮三郎

尙初段より二段へ、二段より三段へ昇進したる者ある由であつたが、當日は發表されなかつた。

一〇 明治三十九年史

(一) 内田師範の渡韓

明治三十七年以來師範として熱心に部員を指導せられたる内田師範は、今回朝鮮統監府に赴任することとなりたるを以つて、二月七日午後二時より餞別勝負を行ひ、夕刻より送別茶話會を催した。

餞別勝負としては、有級者有段者の三本勝負二十五組を行ひたる後、内田師範出でて、自ら同夫人を對手にその考案にかかる勝負之形を演ぜられたるは、日新しきものであつた。次に五人掛二組十人掛一組あり、吉武二段對一級近藤、中田、初段塚本、中野、大塚の五人掛は中野と引分、福田二段對有級者十人掛けは七人目の小野に負け、藤崎三段對初段早川、山中、中野、宮部、二段福田の五人掛けは福田と引分に了つた。

右終了後送別茶話會に移り、幹事盛田保三氏の送別の辭に對し、内田師範告別の辭を述べ。其説く所言々句々肺腑より出で、只管功を他に譲り、若し自分が多少なりとも柔道部の爲めに盡したる所ありとせば、そは今後に於て現はるるもの